
私と君と異世界と

綴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と君と異世界と

【Nコード】

N7369S

【作者名】

綴

【あらすじ】

小さいときに見た不思議な夢をもう一度みた主人公の燐は、なぜか頭から夢の内容が離れなくなってしまう。不思議に思いつつも燐は友達と学校へ向かう。

しかし登校途中、強烈なめまいに襲われて倒れてしまう。目を覚ました燐が見たのは、日本とは違う見慣れない景色だった。

とりあえず歩いて行った先で出会ったリイ、リアン、カイルの3人で燐を拾ってくれた商隊と共に、元の世界へ帰る方法をさがしつつ旅を始める。旅する先で燐が見るものは？夢に見た少年とは誰なの

か？ 燐は無事に元の世界に戻れるのか ！？

「無事に帰れるかじゃない。何が何でも、絶対に、帰るんだ」

コメントやアドバイス、感想等受け付けております。

よろしければ改善点などお聞かせください！

なお、この話は行き当たりばったりに進んでいきます。

プロローグ

目を開けると、そこは暗闇だった。黒よりも濃く深い闇が、少女を包むように存在していた。自分以外は誰も、何もないかのような場所のはずなのに、不思議と怖さは感じなかった。

ふと、人の声が、音が聞こえた気がした。小さすぎるのか、声ではなく音として。

「……………誰か、いるの？」

思わず声をかけてしまった少女は、音がする方へ歩き始めた。しばらく歩いて着いたところには、一人の男の子がいた。髪は肩の辺りまであり、顔はよく見えない。しかし服が王子様のような服だったため、

（ああ、これは夢なのか）

そう思った少女は、少年の前に座り、聞いてみた。

「どうしたの？」

「……………っ!？」

聞いた瞬間、驚いたようにぱつと顔を上げるので、聞いた少女も驚く。

「えっと、驚かせてごめん。いきなりで悪いんだけど、どうしたの？ そんなに、その……………泣いてるけど」

何をどう言ったらいいのか分からず齒切れの悪い聞き方をしてしまい、怪しい人を見るような目でみられる。それでも逃げずにちゃんと答える辺り、素直なのだろう。

「……………逝ってしまった人がいる。もう、会えない」

おそらく、その逝ってしまった人というのはとても大切な人だったのだろう。嗚咽をこらえるようにしても聞こえる微かな音が、少女の心になんともいえない感情を呼び起こさせる。

「大事な、人だったんだね」

「ああ。とても、とても大切な人だった」

しばらく沈黙して、座り込んでいた。それは重苦しいものではなかったが、少年が立ち上がったことにより、沈黙は破られた。

「俺はもう行かなければならない。……そういえば、お前の名前は？」

「お前は失礼だからやめてほしいな。私の名前は、木崎^{きさきりん}燐。君は？」

「俺は……っ!!」

少年が名を告げようとしたその時、いきなり突風が起こった。全てを巻き込もうとするかのように吹き荒れる風に少年の名前は聞き取れず、燐と名乗った少女は風から顔をまもるように腕で覆い、少年の方へと目を向ける。

「だ、だいじょうぶー!？」

「そこ、からっ動くなよっ」

両方の手のひらを燐に向け、ブツブツと何かを呟きだした少年の体が光がもれたように輝き始め、その眩しさに目を開けていられなくなりギョツと目をつぶり、また目をあけた燐が見た景色は。

「私の、部屋？」

どうやら夢だったらしい。そういえば最初の方で夢だと認識していた。短い夢だったはずなのに、最後の方ではすっかり忘れていた。でも、見たことのある夢だったなあ、なんて考えながら着替えているうちに思い出した。

「ああ、そうだ。小さいときに見た夢だ」

(一度見た夢をまた見るなんてこと、あるんだなあ)

そんなことを考えていた燐は、髪を梳かすまで気がつかなかった。

自分の髪が、寝ているだけではありえないほどグシャグシャに絡まっていたことに。

1話 いつもの朝に、贈り物。

異常なほどボサボサな髪をブラシで梳かすたび、頭皮がひっぱられる痛みに若干涙目になりながらも仕度を終えた燐は朝食を食べるために階段を下りていく。

「……………あれ、ばあば、着てたの？」

「燐がぐっすり寝てる間にね」

「そんなに怒らなくてもいいじゃないの。ねえ、燐。そろそろご飯食べたほうがいいんじゃないかしら」

何度も起こしたのに起きないんだから！、と怒る母・杏子きょうこと、それをなだめるようにのんびりと笑う祖母・イチの声に迎えられ、おとなしく席に着く。

「いつも先に食べてていいって言ってるじゃん」

「そういうわけにはいかないのっ」

プリプリと怒る母は八つ当たりするかのようにはにゅーすとに齧かじり付く。

「あのさあ、いつも不思議に思ってたんだけど。なんでお母さんは朝トーストとご飯を食べてくワケ？ 普通はどっちかだと思っただけど」

「お腹いっぱい食べないと元気でないからに決まってるじゃないの！……………って、た、大変っ。もう時間が！！」

慌てふためきながら食器を片づけ、仕事へ向かおうと小走りな杏子に「いつてらっしゃーい」と声をかけると、玄関に荷物を置いた杏子はすごい勢いで燐のもとへ走ってきた。

「わ、ちよっ、何やって……………」

「…………お母さん、信じてるから。絶対に、無事に帰って来るって……………」

「お母さん……………」

「っ、・・・・・・なあんてね。びつくりした？ あたしの演技力はまだまだ健在ね！ って、じ、時間時間！！」

「はあ？ って、っもう！！ なんなのよいきなり。あああもう、なんかむかつくわー」

バタバタとわざとらしく足音をたてて出ていく杏子の後姿を目で追いながら、でも・・・・・・と燐は思う。慌てて出て行った母の顔がチラリと見えたとき、なにかがキラリと目元で光った気がしたのだ。

（涙？ でもなんでいきなり泣きだしたりなんか・・・・・・）

不思議に思いつつも時間が迫っているのは自分も同じなので、さっさと食べよう、とおかずに箸を伸ばす。

「はあー食べた食べた。んじゃ、行つてきます」

「燐、ちよつと待って」

靴を履いて振り向くと、イチが何かを手に持ってやってくるところだった。

「なに、どうかしたの？」

「これ」

「え？ うわ、これはあばが大事にしてるやつじゃん」

イチが燐に差し出したのは、小さいがキレイな宝石のついた指輪に銀色の鎖を通したネックレスだった。それは、昔死んでしまった祖父から贈られたといって大事にしていたもので、いつもはイチが首にかけている思い出のものだという。ちなみに、祖父はここ日本の生まれではないらしく、プロポーズのとき指輪のかわりにネックレスを贈ったのだとか。結婚してしばらく経ったころ、ようやく結婚指輪という存在に気づいたらしく、キレイな指輪がイチの左薬指にはまっている。

「何でこんなものを・・・・・・？」

「御守りよ。貴方が無事でいられるように、くじけないでいられる

ように。……いい？ 燐、絶対に、無事に帰ってきなさいね。私たちよりも先に死んじゃったりしたらダメよ」

「大げさだなあ、たかが学校行くだけじゃん。死にやしないって。ていうか、これ貰っちゃっていいの？ 大事にしてたんじゃ……」

「」

「いいのよ、それは最初から貴女のためにある物だから。それに私のはここにちゃんとあるわよ。おじいちゃんが同じものを2個買っていたのよ。一つは私に、もう一つは貴女に、って」

「え、お母さんのじゃなくて？ うーん……じゃあこれ、ありがとう貰っておくね。じゃ、行ってきます」

「行つてらっしゃい」

燐はニツコリと祖母の言葉に笑顔を返して玄関を出て行つた。

「無事に帰って来るのよ、燐。いつも思っているからね……」

「」

呟いたイチの目から涙が一粒零れ落ちた。ハンカチで涙を拭うと、キッチン向かった。

「さて、洗物をしますか」

悲しい気持ちを吹き飛ばすように元気に言つたイチの顔は、孫を案じる不安や突然の別れに対する悲しみではなく、大切な人が笑顔で帰ってこれる場所を作ろうとする笑顔が浮かんでいた。

2話 朝と、眩暈と、別れと。

「……なんだっただろ、お母さん。おかしいのはいつもだけど」
なんか、いつもと違うような……。

最後の言葉を口には出さずに心の中で呟いた燐の体に、ドンツと大きな衝撃がはしった。なんとか体勢をなおして振り返った背後には……

「燐っおっはよー！ あれ、なんか元気くない？」

「なんだ、万智か……」

「え、何その反応！？ 酷くないかつ」

朝から元気いっぱいな、まるで小学生のような性格をした少女・万智^{まち}はいわゆる幼馴染というやつで、保育園から一緒の親友だ。もつとも、そんなことを言えばますます調子に乗るにちがいないから口には出さないが。

「んー、まあいいや。それよかどした？ なんか、予想外のことが起きましたっ！……みたいな顔してるけど？」

「……それがさあ、今朝起きたらなんか知らないけどお母さんとはあばが集合してたワケ。でね、まあ普通に朝ごはん食べてただけど。お母さんが出かけるときにちよつと様子がおかしかったんだよね。私が学校行くときなんか、ばあばがネックレスくれたし。二人とも、なんかいつもと違うっていうか……おかしいっていうの？ そんな感じだったんだよねえ」

燐が話し始めてから静かに聞いていた万智は、まじめな顔をして呟いた。

「やっぱり、行かなきゃいけないのか」

「は？ なんか言った？」

「え、何も言っていないよ？ 空耳じゃないの。もしかして……幽霊っ！？」

「いやーっ、あんた私が嫌がるの知っててやってるでしょ！」

いつもと同じように万智とふざけて、一緒に笑いあつて。……その時、燐の視界が激しくゆれた。上下左右にグワングワンと脳を力任せに揺すぶられているんじゃないかと思ううちに、吐き気が襲ってきた。

「燐……？ ま、まさかもうつ！？ 早すぎる……っ」

「ま、ち……っ何を……何か、知っているの、ツク。は、気持ち、わる……っ何これ……！？」

混乱しつつも、突然の眩暈と吐き気に立っていられなくなつて座り込んでしまった燐の肩を包み込むように万智は腕を回す。

「ねえ、燐。聞いて？ 今から燐の右手の甲に呪を刻むね。ちよつと痛いかもしれないけど、我慢してね」

「っ、え……？ い、痛っ、何を……！！ 呪つて何！？」

燐の右手を持ち上げて、その手の甲にかざしていた手を万智は、ふっ、という気合とともに押し付けた。

「あ……っ」

右手の甲に走った、焼きごてを押し当てられたような痛さに声も上げられない燐の髪を、大粒の涙を流しながら撫でる。

「ごめんね、こんなことしかできなくて。……この呪は、燐が困らないように、ま、守つて、つくれるからね。私には、こんなことしかできないけど、いつも、いつも燐のこと想つてるから……！！」

「……あり、かと……」

なんだかよく分からないがとりあえず礼をいうと、万智はびっくりしたように大きな目を見開いた。眩暈と吐き気に襲われて周りすら分かりづらい中で、万智の顔だけがはっきりと見えた。

「泣かないで……っ、ていうか、なんで……」

なんで、万智はお母さんやばあと同じようなこと言ってるの？

最後まで言葉が続くことはなく、ゆっくりと燐の瞼は閉じていく。

心の中で本能のようなものが「閉じちゃいけない」と叫んでいても、自分の力では開けられない。

狭まる視界のなかで、万智が燐をぎゅっと抱きしめるのを感じた。万智の涙が制服に染みていく。

「泣かないで……」

燐は繰り返す。大切な親友に泣いてほしくないから。完全に閉じた瞼は、もう自力で開けることができない。それでも。と、燐は声にならない声で囁くように言った。

「泣かないで……」

完全に意識がなくなった燐の体がゆっくりと、しかし確実に透けていく。

「燐……っ」

叫んだ万智は、力いっぱい抱きしめた。消えるな、行くなと叫ぶ心を表すように。

燐が完全に消えたとき、抱きしめていた手を自分の肩に回した。叫びそうになる口を噛みしめながら。

2話 朝と、眩暈と、別れと。(後書き)

ちよつと(いや、かなり?)短いですがようやく出発です!

1話 気づいたら。「どっだ、ここ」&幼女

「い、イタタ……」

今、燐はゴトゴトと舗装されていない森の道を通るほろ付き馬車の中に荷物のように転がされている。その理由は、ほんのちよつと遡る。

約一時間ほど前……

「……はあ？」

目を覚ました燐は、視界に映る世界に思わずケンカを売るような声を上げた。無理もない。燐の前に広がっているのは見慣れた景色ではなく、「ここ日本じゃないじゃん！」と思わず突っ込んでしまふような草原が広がっていたからだ。

「え、これ夢じゃないよね？ 多分。……これはあれか、異世界とかいうやつか？」

そこに思いついたとき、燐の思考は爆発した。

「……はあああああ！？ 別にあたしじゃなくてもよかったじゃん！ もうっ見たいアニメとドラマと動画があつたのに！ あっ、曲も聞けないじゃん！ マンガも小説も読めないじゃんよお！！」

この際はつきりと、かつ簡単に明言すると、燐はオタクである。興味があればファンタジー・恋愛もの・新聞・醤油の瓶のラベルまで、幅広く読んでしまう。あの性格をした万智でさえ、燐のこの部分には苦笑いしかできなかった。

まあそれは置いて。

「……まあ、ここで現状を嘆いていても仕方ない。よし、とりあえず歩こう」

本当に嘆いていたのかは疑問が残るところだが、気分を入れ替えて歩いて行った燐だった。

いつの間にか森のようになっていた。木々の間から入ってくる木漏れ日に照らされて明るい道を歩いていく燐は、清々しい空気に深呼吸をした。

「あゝ、きつもちいー……」

辺りを見回しながら歩いていくうちに、湖が見えた気がした。

「おお、湖がある！」

湖を見つけた燐は、疲れた足を浸そうと思い、湖へ近寄って行った。

「……だあれ？」

湖のほとりまで近づき靴などを脱ごうとしたところで、いきなり聞こえた女の子の声にびつくりした。

「えっ！？ あ、木崎燐です」

「ふうん？」

驚きながらも律儀に返事をした燐の前に、目の前の湖からふんわりとした服を纏った女の子が浮かんできた。

「ぎゃーっ、幽霊！？」

「むう、失礼な。リイ800歳くらいだけど、死んでないもん！」

「は、800歳？ こんな小っちゃいのに？」

「むうう！ もう！！ リイは神様なんだよ！？ もうちょっと、けえい？……あつ、敬意を」

「あああ、ていうか超かわいい！ どうしようめっちゃくちゃかわいい！！ こんな妹がいたらなあ」

「え？ そ、そう？ そうならいいんだよ。別にかわいいって言われて嬉しいワケじゃないけどさ」

「まさかのツンデレ!？」

「え、ツンデレって何？ 今のはちょっとふざけたただだよ？」

え、なんだ……。とか言いながら落ち込んでる隣を見て、自分のことをリイと呼んでいる女の子は、ふふっ、と小さく笑った。

1話 気づいたら。「どっだ、ここ」&幼女（後書き）

中途半端に切れちゃいますね（笑）

2話 新たな出会いと、契約と。

「それで、どうしてこんなところにいるの？」

「よくぞ聞いてくれた！ それは聞くも涙、語るも涙……」
ちよつとふざけた口上をリイが一蹴する。

「おおげさに言っていないで、はやく説明！！」

「うっ。……まあ渋るほどのことでもないからいいけどさ」

そして燐は話し始めた。自分はこんなところを知らないということ、いつも通りに学校へ行こうとしたらいきなり眩暈と吐き気が襲ってきて気を失ってしまったこと。

「……へえ、燐は『異世界』からきたんだね！」

「うーん、そういうことになるんだよね、きつと。いや多分？ あつ、ていうかさ、リイは帰る方法知らない？ 私、早く帰りたいんだけど」

「ん、リイは知らないよ？ それに、次元転移魔法はもつと長く生きてる精霊か、強力な力を持つてる人じゃないと行使できないの」

「ふーん……800年生きてるリイでも使えないんだ。ねえ、力つて？」

「力っていうのはいろいろあるんだよ？ 神力、聖力、魔力……それに光や闇のエネルギーも」

「へえ、いろいろあるんだ。ていうか三つとか五つとかぐらいじゃん」

「力やエネルギーは、今こうしている瞬間にも新しく生み出されているんだよ。思いの力、想う力、怒りのエネルギー、衝動的に生み出した感情の力……。いろいろな力が生み出されては、消えていくの」
「なんで消えるの？」

「単に力不足だったってことのほうが多いけど、世界のバランスを崩してしまうほどのものだったりすると『大いなる意思』の力が働

いて強制的に消されちゃうの。そういう大きな力がバランスを崩した後じゃ遅いから」

「へえー……。ねえ、『大いなる意思』って何？」

そっかー知らないのかーと一人頷きつつリイはまた口を開いた。

「世界はいくつもいくつもこの世に存在しているの、暗くておつきくて、なっがーいいカーテンの上にガラス玉が何個も転がってるみたいに。そのさまざまな世界は、過去も、今も、そしてこれから先も存在し続けるんだけど、ジャマしてくる強大な力があるの。それがさっき言った神力や魔力、エネルギーや強い感情……そういうた力は使う人によって毒にも薬にもなるってこと！ 『大いなる意思』は、自分たち世界が存在し続けるために邪魔者を倒す力、世界の力っていうことなんだよ」

へえ〜なるほど、と納得しているといきなりリイが声をかけてきた。

「ね、燐！ なんかね、燐からいい匂いがするの！！」

「え、いい匂い？ 香水とかはつけてないんだけど？」

元の世界にいたときは、周りの女子が恋だ化粧だと騒いでる間、燐は万智が持ってきたチョコレートを歓喜の声を上げながら食べていたのだ。

「ふうん？ ……よし、ねえ燐！ 契約しようよ」

「は？ 契約？」

「燐みたいにい匂いがする人とは、契約したい！ 痛くないからねえ、お願い！！」

「え、まあ痛くないんだったら……」

「ありがとう、燐！」

嬉しさのあまり、リイは燐に抱き着いた。（わーかわいいっ！）なんて思いながら抱き返していると、

「えっとね、契約の徴しるしはどんなのがいい？」

「え？ 徴しるし？……んー、それ、キレイ？」

「すごくキレイにもできるし、小っちゃくもできるよ」

首飾りつぽく……チョーカーにしようかな。

「ふーん？　じゃ、チョーカーみたいに首の回りをぐるっと」

「おっけー！　あのね、契約するときにはリラックスして、心の中に浮かんできた言葉をそのまま声にだしてね」

「ん？　うん、わかった」

「じゃあ、いくよ？」

そういうとリイは、腕を横に薙いだ。二人を囲うように水の壁が円形に立ち上がる。

「な、何これ！？」

「ジャマされちゃったら大変なことになっちゃうから。結果みたいなものだよ！」

「ふ、ふうん……」

大変なことになる、とはどういう意味なのか聞きたかったが嫌な予感があるので聞かないことに決め、改めてリイと向かい合った。

「異界から来る、来訪者よ。我、大精霊が一人、水を司る”リイラナイ・フォーノ・アルブレイジャッダ”と契約を交わすことを望むか。心の言葉を申せ」

話を自分に振られた燐は、心に浮かび上がった言葉をそのまま口にした。

「私、木崎燐は、大精霊が一人”リイラナイ・フォーノ・アルブレイジャッダ”と契約することを望みます」

「汝、嘘偽りなく誓えるか」

「誓います。でも友達のほうがいいかなー。誓うって主従関係みたいだし。ってあっ」

なんとなく口に出した言葉に、やらかしちゃったかも、なんて思いながら恐る恐るリイの方を見ると、ビックリしたように目を見開いて固まっていた。かと思っただけいきなり笑い出した。

「……ふ、あははははは！！　ひ、ひはははふぐつ……っ、つつ！　ふ、くほっ」

「え、なに！？　どうしたの！？」

まさかリイの頭がイかれてしまったのかと思うほど、必死に笑いをこらえている。

「えーと……？」

「ご、ごめ……！ コホン。……よろしい。では、汝と契約を交わそう」

すっ、とリイが腕を伸ばすと指先から水が一本の紐のように出てきて、燐の首に三重に巻きついた。きつくなく、重さもあまり感じない。

「わあー、ありがとう！」

「ふふっ、どういたしまして」

「……て、いうかさ。大精霊ってリイ、その、水の精霊のなかで一番偉いってこと？」

「んん？ そうだよ」

「うわー、また面倒くさそうなことに……」

「なんか言った？」

「え、いや、別に？ それよりさ、今さらなんだけど。なんで言葉が通じるの？ 異世界なんだから通じないんじゃない？」

「この世界の言語が燐のいたとこのと似ているっていうのもあるんだと思うけど、燐の右手の甲に呪が刻まれてるから、そのおかげだと思うよ？ まあこの呪は他にも何かありそうだけど」

「へえ……」

万智に感謝を心の中でいう。

ありがとう……。

そんな燐を微笑みながら見つめていたリイは、なにか感じたのかいきなり鋭い誰何の声を放った。

「誰？」

最初に燐にかけた声色とは違い、あきらかにリイは相手を敵視している。

叢をかき分けて出てきたのは、長身の陽気そうな男だった。ローブを目深にかけ、顔が分からない者がその後ろに立っているが、こ

ちらも背が高いので男と燐は判断する。

「うわ、おっどろいた。フォーノが契約したってのは、そのちまいのか？」

「……うるさい。黙れ」

「ひっど！」

二人の男のテンションの違いに、なんなんだこいつらは……、と思いつつも、燐はついその騒がしさに凝視してしまう。

「そなたら、何故ここにおる。何の用で来た」

なぜか古めかしい口調になっているが、イライラしたようにリイが問うと、燐としては「ちよつと怖いんですけど!？」と、軽くパニックになり、見ていることしかできない。

「何の用かなんて言わなくてもわかるだろ。その迷子を拾いに来たんだよ」

「え、迷子？ 拾いに来たって、私？」

「そーそー。そのきみ!!」

にこやかに笑いかけてくる男に若干気を許しかけたとき、リイの言葉が割り込んだ。

「ならリイも行くー!」

「なんだその喋り方。湖の管理はどうすんだよ」

「他にやりたい人いるし」

「え、そんな簡単なんだ……」

二人はコントでもしているようにペラペラとしゃべり続け、その結果、リイは説得することができたようだった。

「じゃ、いこつか」

「えええっ! ちよつとリイ、なんか怪しくない？」

「怪しいけど大丈夫だよ」

「えー……」

しかし、「ここでうだうだやっていても元の世界へ帰れるとは限らない」とポジティブに考えると、一緒について行った方がいいんじゃないかと思えてきた燐は、燐の返事を待っている3人にむかつ

て深々とお辞儀をした。

「……よろしく願いします」

「っしや！ 任せとけ」

「何を」

「そりやいろいろだよ」

フードで顔がよく見えないが、意外に低い声の男に聞かれ、元氣いっぱいにもう一人の男は説明を始めた。そんな2人を尻目にリイは隣に抱き着いた。

「りーんっ！ これからよろしくね!!」

「もちろん。こちらこそ、よろしくね」

何も知らないこの世界で、何年も前からの友達のように接してくれるリイに嬉しさがあこみあげてきて、思わず力いっぱい抱きしめ返してしまった。

「あーっ、ずりい！ 俺もやりたい！」

「バカじゃないのか、お前。お前がやったらただの変態だ。いや、もう変態か。邪魔して悪かったな、変態」

「バカじゃねえよ!! あと変態変態って呼ぶなっ」

落ちていた男にどなっている男はまるつきリイジられているようにしか見えなかったが、言動のそこかしこから仲がいいのが伝わってくる。

リイともこんな風に仲良くなれたらいいな、なんて思いながらリイと笑いあった。

2話 新たな出会いと、契約と。(後書き)

今回はちょっと長く書いてみました。

二人の男、怪しく見えますか、ね……？

3話 「自己紹介タイム!!」

「さつてと。それではっ、自己紹介タイム!!」

その時、燐は悟った。この男はいつもこの変なハイテンション野郎……もとい、ハイテンションな人なのだと。

「えー、と……。私からでもいいですか？」

「おお、いいよ」

「私は木崎燐です。あー、歳は18です。他になにかいうことあるかな……」

「あ、俺好きなものとキライなもの聞きたい！」

「好きなものは、マンガとアニメとゲームとボイスと……」

「おお、見事に知らないものばかり!!」

変な合いの手を無視して進める。

「キライなものは、キライだと思ったものです」

「いきなりアバウトに!? ……あ、ねえ。さっきの好きなものを思い浮かべてくれる？」

「え? はい……」

燐の額に手で触れてきた男に唐突に言われながらも思い浮かべる。私の好きなものは……。

「へえ、こんなものなんだ。ほお……てっ!? ……なんだコレっ。男が、野郎どもがぐふえっ! う、うえっぶ……」

いきなり手を離れた男は、気持ち悪そうに言った。

「あ、ごめん。昔友達に無理やり読まされてたやつを思い出しちゃった。大丈夫？」

「燐ちゃんの世界では、こんなものが当たり前にあるの……?」
涙目の男が訊く。

「あ、リイ知ってるよ。こういうの『腐』っていうんだよね!」

「そう! でも、よく知ってるね? これ私の世界のものなんだけど」

「リイ神様だもんっ」

「ああそっか」

「いや、納得すんな。……ああでも、俺もこんなの見たことあるぞ。たしかお前の妹と姉が持つてなかったか？」

「ああ。あの二人はもう末期だ」

ローブを目深にかぶった男が返事をする。どうやら姉妹がいるらしいが、どちらも同じ趣味らしい。

「いや、こいつも末期の症状が出てきているんだが……」

「失礼な。わたしは読まされただけです！！ けっこうおもしろかったけど！」

「そうだよ、そんなふうにつて差別なんだよ」

「はいはい……、それじゃ、こっちの自己紹介もしようか」

燐たちの雰囲気圧倒され、逃げるように話題を転換するとしやべりだした。

「えーコホン。俺はリアン・イロネージャ。歳は25。若いだろ。好きなものは酒と女と……」

「ハイ次」

「燐ちゃん冷たいっ！ ……はいはい、もうっ。キラいなものは辛い物だな。あとこいつとは親戚。ほれ、お前の番だぞ。あとフードとれ」

リアンはばさつと男のフードをはぎ取った。

「……カイル・イロネラ。歳は22。好きなものは甘いものとかおいしいものと昼寝。あと楽しいこと。嫌いなものは楽しくないと思つた事とかいろいろ」

無愛想さにイラッときた燐は思わず口に出してしまった。

「すごい無愛想……」

ばっ、とすごい勢いで振り返ったリアンにびっくりしてしまい、思わずひいてしまった燐を見ている。

「お前、すげーな。この顔見てそんなこと口に出せるの。さすがに俺でも最初はビビったぞ」

「え？」

実は燐は、「リイかわいいなあ」なんて思いながらリイを見つめていたのでカイルという男の顔をまともに見ていなかったのだ。

だがリアンの言葉に興味をひかれ、ゆっくりと視線をカイルに向けていくと……。

「……あ」

そこには、端正に整った……いわゆるイケメンの部類に入る顔があり、その右頬には刀傷があった。しかし、無表情なその顔はどんな攻撃よりも怯むものであり、その口から拒絶の言葉を吐き出されればどんなことになるか……そんなことまで想像させる。

「あー……、その、見てなかったっていうか」

「ブフツ。聞いたかカイル！ 今見てなかったって言ってたぞ！！
どんなに拒絶しても恋する女の子が後を絶たないあのカイルにぐベツ」

「余計な情報を垂れ流すな。だが、ふむ。お前みたいにあっさりしてるやつは好きだ。これから友人として仲良くやっていきたい。よろしく」

「あ、こちらこそ。ていうかすみません、あんなこと言っちゃってあたし正直者でして……。と心の中で呟く。するとリアンが爆笑し、カインは「くっ」とふきだした。燐は何が何だか、といった表情で二人の表情を窺う。

「え、なに。まさか心の声がどのとかいわないよね」

「ふふふぐつ、はあ。正解！！ 俺ちよつとした魔法なら使えるからちよつと心の声を聞いててみた。まあそのせいでさっきみたいないことにもなっちゃったりもするんだけどね」

「それはお前が未熟だからだ」

「うつせえよ。お前だつて聞いてたくせに！」

「俺はこいつが信用できるやつかどうかを確かめようと思って……」
「じゃああしい！ まったく、ごちゃごちゃと。それとな、こいつが無愛想なのは人見知りするからだ」

は……？ という文字が一同の空気に降りてきた。こないかい男が、人見知り？

誰がぶ、と噴き出したのか、爆笑の嵐が吹き荒れた。ところを限界になったカイルが恥ずかしげに怒鳴って収まる。

こっちではじゃかあしいなんて言葉までつかわれているのか……？と疑問に思いつつも、とりあえず場の空気を換えるために質問してみる。

「あのさ、この世界ってどういう世界なの？ あたしの世界は、えっと、太陽系第三惑星……だっけ？」

「ああ、詳しいことは知らないけど地球とか日本とかは知ってるよ」

「え、なんで？」

「それは歩きながら話す。おい、リアン。もう行かなきゃいけないんじゃないか」

「おお、そうだな」

「え、何処行くの？」

「リィね、隊商のテントだと思う！」

「ああ、フォーノは知ってるんだったか」

知ってるよー、と答える声にまたかわいい……！と抱きしめる隣をリアンとカインはせかす。

「……うーし。じゃ、しゅっぱーっ！」

3話 「自己紹介タイム!!」 (後書き)

名前がようやくだせました！

4話 この世界と燐の世界

そして冒頭に戻り ……。

「あのさ、なんでこんな舗装されてない道を縄で縛られて体中痛い思いをしなきゃいけないわけ？」

「えー。だってさあ、これから通る『国境の門』は取り調べが厳しいんだよ？ 身分証明書なんて燐は持つてないし、ましてやこの世界の人間でもない。そんなのバレちゃったら……ねえ？」

「え、なに。ちよつと、そこでとめないでよ！」

「ええー、言っちゃっていいの？」

「う……！ や、やっぱいい。なんかイヤな予感がする」

「遠慮しないでいいんだよ。実はね、……」

「い、嫌ああああああ！！　しゃ、喋るな変態っ」

「変態だなんて、ひどいつ！」

「うるせえ、バカ」

燐とリアンのコントのようなやり取りに耐え切れなくなったカイルが、リアンに向けてゲンコツをかます。

「いつてえ！　カイル、なにすんだよっ」

「お前がうるせえから悪いんだ。ちつとは黙ってる」

「そうだよ。それに他にも話さなきゃいけないことあるでしょ？」

話したいこと？、と首をかしげる燐に今度はリアンに代わってリイが話し出す。

「あのね、この世界にはね？　燐の世界の人もほんの少しだけいるんだよ？」

「え？　どういうこと？」

「うーん……。えつとね、燐の世界でね、辛いことがあつて、それに耐え切れなくて……。そんな人が、ここに飛ばされてきて少しずつ自分の心と体を癒して帰っていくの。でも、全員がここに来れるってわけじゃないから、向こうの世界では自分で命を絶ってしま

う人とかがいるんだけど……」

「なんで全員が来れるわけじゃないの？ それに、その、自殺しちゃう人がいるってなんで知ってるの？」

「全員が来れない理由は知らないんだ。あと、自殺しちゃう人がいるっていうのは感情、かな？」

「感情？」

「そう。リィね、神様だから。たまに強すぎる感情とか伝わってきた」

ほー、と考えている燐を微笑ましくリィは見つめる。リィは見た目はかわいくても、中身は約800歳である。精霊のなかでは若くても燐の方が年下で、そんな燐がまじめに考えているのはとてもかわいく思える。

「うーん、感情と自殺がどうつながるの？」

「よくぞ訊いてくれました！」

まるでそう訊いてくるのを待っていたかのように、リィは嬉しそうに笑った。

「感情ってね、自分の『今』を、『未来』を左右するものなんだよ？ 過去だって、感情があって、それに合わせているんな道を選んで歩いてきて、それが積み重なって今になるんだから。起こった出来事をその人がどんな風に感じるかは人それぞれだけど、悲しみと喜びだったら、誰だって喜びの方がいいでしょ。だから悲しみに耐え切れなくなったとき、人は大きく分かれるの」

小難しいな、と感じた燐は簡単に説明してくれるように頼む。

「ふふ。にがーいお薬飲むよりも、あまーいお菓子を食いたいよね、ってことだよ」

「ふー……ん？」

リィに子ども扱いされたような気がしたが、とりあえずその説明で納得することにした燐だった。

穏やかな風景が続き、空では鳥たちが旅をする。のどかなそのひとは、燐の心をすこし落ち着かせることができた。

しかし現代っ子の燐は何もすることがなく、暇で暇で仕方ないので馬の手綱を握るリアンたちに声をかけた。

「ねえー。まだあー？ もう暇で暇で仕方ないんだけど」

「んー。もうちょっと時間がかかるんだけど……。あ、そうだ！

燐が好きなものでさ、こういうのあったよね」

いきなり幌馬車をひかせている馬の手綱をカイルに任せると、リアンは幌が被さった荷台に転がされてる燐の耳元に口を寄せ、低い声で囁いた。

「ね、こういうことでしょ。……燐、だーいすき」

「ぬあつ！？ ちょ、み、耳が。耳があああ！！ くすぐった、ちよつとマジでこそばゆいんですけどっ！」

必死に耳を手でこするうとしてゴロゴロと荷台を転がりまわる燐を見てリアンは大笑いした。

「あつはははははははつ。カイル、リイ、見ろよ！ めちゃくちゃかわいい反応すんだけど！」

「リイと呼ぶなっ」

「呼びやすいじゃん」

「む。まあ、仕方ないか……」

「ね。なんかリイってあたしと喋るときとなんか口調違うくない？」

「えー、おんなじだよ？」

えーそうかな……、と疑問に思う燐をおいて話は続いていく。

いつの間にか林道のようなところを抜け、燐がゴロゴロと転げまわっていた間に道は通りやすい平らな道になっていた。舗装されてはおらず、よく人やこういう馬車などがよく通るのか踏み固められている。

「……あれ、もしかしてその『国境の門』とやらの近くまできてい

たりとかする?」

「ああ。この調子でいけばあと15〜20分程度だろう」

「どうやら、おしゃべり好きなリアンはリイと話を続けていたら笑い話に発展してしまつたらしく、二人そろつて笑い転げている。なので代わりにカイルが説明をしたらしい。」

「カイルってさ、あんまり喋らないし笑わないけど、なんで?」

「喋るときは喋っている。笑わないのはおもしろいことがあまりないからだ」

「あー、わかる。なんかさ、無理に愛想笑いしていると顔の筋肉引きつってこない? あの感覚が嫌でさ」

「それは分かる。……一つ聞きたいんだが、いいか」

「ん? ああ、どうぞ?」

「最初から顔を見てなかったにしろ、雰囲気で話しかけようとは思わないといわれたことがあるんだが」

「それ言つたのは俺!」

「黙ってる」

「はい……」

「コホン。……で、だ。なぜ話しかけた」

「んー。私がいた世界にもね、そういうのいたんだよ。私の男友達で、ちよいといいいガタイしてるやつが」

「ガタイ?」

「ああ、体のこと。でもね、体は大きくても雰囲気とか顔がなんかこう……『優しい熊さん』みたいなヤツなの。そいつもね、カイルみたいに最初は怖がられてたんだけど、少しずつ相手のことって分かってくじゃない? 一緒にいれば。」

で、そいつは今は結構人気者になってるんだ。頼りにされちゃったりなんかして、さ。だからね、感覚的に分かっているのよ。そういう人たちほど情が厚いし、悪い人ばっかじゃないって」

そう話し終わるとカイルはふん……、と鼻をならすようにして照れたようにそつぽを向いてしまった。それを目ざとく視界の端に見

つけたリアンはからかう。

「おお！ 久しぶりに見たぞ、お前が照れてるところっ！！」

「うっせえつつってんだろ！」

キレたカイルはゲンコツを力いっばいリアンの頭へと振り下ろす。

「い……ってえ……」

「あ、ねね！ あそこ見てっ、あれがそうじゃないかな？」

「おお、やっと見えたか！ 俺もう疲れたぜ……」

リアンがはぁ……、とわざとらしくため息をついて大きく背伸びをしてみせる。

「お前はほとんど一人で騒いでいただけだろう」

「そうだよ」

「うっせえ！」

三人でにぎやかに喋っているのをしり目に、燐は見えてきた『国境の門』を静かに見つめる。

あれが、『国境の門』……

近づいてくる門は大きくて、まるで燐をこの世界からはじき出すうとしているかのようだった。

5話 『国境の門』

少し経つと見えてきた、国境の門を通るために並ぶ人の列に燐たちも並ぶ。

そろそろ門番に話を聞かれるころか、というときにリアンが鼻歌を歌いながら「ちよつとごめんね」と燐に囁いた。

「何が……っ、がはっ」

荷台に転がされた燐の腹に、リアンがいきなり蹴りを入れた。

「おい、お前。反抗的な目エしてんじゃねえぞオラ」

ゲホゲホと体を丸めて咳き込む燐の体を、まるでいうことを聞かない動物を見るような目で見てまた腹に蹴りを入れる。

「おい、何事だ！」

いつの間にか順番が回ってきたのか、門番たちは馬車の隣にいた。説明を求める門番たちに、いつの間にかロープを目深にかぶったカイルが事情を話す。

「いやね、たいしたことじゃあないんでさあ。ただこの娘っこがちいつとばかり暴れやがったもんでね。門を通ったあとに騒ぎを起こされちゃあ……ねえ？ 門番の旦那」

「む……。そうか。しかし仕置きは静かにやってくれ。罪人だか召使いだかしらんが、今はあまり騒ぎを起こすな」

「いやあ、あつしたちもそういうつもりでやったんじゃないんですよ……。ところで、旦那。この町に勇者の一行が来ているってえのは本当ですかい？」

「ああ、本当だ。……と、そろそろ混んできた。早く通れ」
「ありがとうござえやした」

パツカパツカと馬車が進み、多くの人が歩く大通りを抜け、しばらく行ったところの角を曲がり、喧騒が遠くなり微かに聞こえてくる裏道に入ったところのさらに奥の角を曲がったところでようやく話し出した。

「よし。もう話していいぞ。あとさつき蹴っちゃってごめんな」
「いったい……。マジで痛いんですけどこんにやるうつー！」

「だからホントにごめんって」

「リアンったらあそこまでしなくつてもよかったんじゃないの？」

「うつせ。今日の奴らは比較的簡単に通してもらえたけど、門番長がいたらやばかったんだかな！」

「うー。まあ、しかたない、のかな？」

「そうそう、仕方ないんだって！」

「「お前が言うなっ」」

燐とリイが口をそろえて言うと、リアンは「ホントごめん……」
とうなだれた。

「何も本当にやらなくても……。はあ。お前って本当にバカだよな」
「うつせえよ……」

皆に言われてすねたリアンは、とりあえず燐を縛っていた縄をほどいた。

「ていうかさ。カイルすつごい訛ってたけどなんで？」

「……変装？」

あ、そうですか。

「んでさあ、今度はどこに向かってるわけ？」

「旅宿たひやどという旅人や行商人たちなどが泊まる宿だ。今はそこに隊商の仲間たちがいるらしい」

「テントじゃなかったの？」

「今、この国に勇者の一行が訪れているんだよ。こんだけにぎやかだったら品物も売れるだろううつーことで移動してきたんだと」

燐とカイルの会話にリアンが加わり、会話が進んでいく。

「ふーん。あれ、そういえばリイは？」

「精霊界にでも戻ってるんじゃないかなー」

「久しぶりにあの泉から離れたから疲れたんだろつ。少し経てば出てくる」

「ふーん、そうなんだ。リイ早く慣れるといいね」

「ああ」

リイを思いやる燐の顔は、精霊やら何やらそんなものは関係なくただ友達を案じているそれで、カイルはいいやつなんだな、と思った。

しかし、すごいな。異世界に来たってだけでも混乱するだろうに、精霊を友達のように扱い、あげくには心配までしている……。こいつ、頭の中どうなってるだろう。

そんなことを考えていると、リアンが考えを『読んで』いたのか、『ぶくすうつ』と我慢しようとして失敗したような笑い声を出した。
「お前……」

「しーっ、大声出すなよ。燐が起きちまうだろ」

初めてのことでただで疲れていたのか、いつの間にか燐は横になっ
て眠っていた。

「……いつの間に寝ていたんだ？」

「お前がボケーっつとしてる時に、だよ。馬車の揺れが心地よかった
んだろうな。……んなこと言ったら俺も眠くなってきたんで、あ
とよろしく！……グー……スपी……」

「ちよっ……。はあ、寝んの早すぎんだろ」

とりあえず手の届くところに置いておいた布を二人にかけてやり、
カイルは前へと向き直った。

「ふあああ。……さすがに俺も眠いんだが」

仕方ないな、とため息をついて、カイルは目的の場所『旅宿』へ
と馬車を走らせた。

6話 旅宿と、淋しさと。

「……い、おい。起きろ二人とも。着いたぞ」

「んー？ …… ああ、着いたんだ」

「ああ。つーかこのバカ起きないんだがどうしようか」

「えー、放っとけば」

「うん、ごめん。今起きた」

最初から起きろよ……。と朝から突っ込む気にもなれずにいると、いきなりカイルを後ろから杖が襲った。

「いつってえ！ なんだよ！」

「うるさいわい。客が入ってくる夕暮れ時に店先で大騒ぎするな！ この宿に迷惑がかかるじゃろうが」

「仕方ないだろ。だいたい、大騒ぎしてたのはリアンのアホだ。俺じゃない」

「そついうの責任転嫁っていうんだぞ！ おばば、俺も騒いでなんてないからな！！」

「知つとるわい。今のははたきたかったからやったんじゃ」

「余計に酷くね！？」

そんな風にギャーギャー言い合っている三人のなかに燐が入っていきけるわけもなく、「どうしよっかなー」とのんきに考えながら馬を見つめていた。

「……で、そこの娘がこつちに來た子かい？」

「ああ」

「木崎燐です。はじめまして」

「わしの名前は……いや、教えるのはもうすこし後にしようかのう。まあわしのことば『おばば』とでも呼んでおくれ」

「はあ……」

変な人だな、と考えているうちに三人の話し合いは終わったらしく、「中に入るぞー」とリアンが声をかけてきた。

「……うわぁ」

中にはいった途端、燐はビックリしたように声を上げた。

「ここゲームの世界みたいだわ……」

そう、この”旅宿”という宿は、内装がRPGのようで、ゲーム好きが来れば間違いなくテンションが上がりそうなところだった。

「皆は？」

そうリアンが聞き、おばがめんどくさそうに答える。

「見世物をやっているころじやろ。お前、そんなことも忘れたのかこのドアホ」

「だから一言多いんだって！」

「お前はいつもうるさいの。まあそれは置いて、今日はもう夕食を食べて寝てしまえ。明日は早いからの。……おお、そうじゃ。

決めたぞ。せつかく二人が戻ってきたのだから舞でも披露しろ。燐、といったか？」

「あ、はい」

「おぬし、歌は好きか？ 音痴ではなかるう？」

「歌は好きです、音痴でもありませんけど……それがなにか？」

「明日はおぬしの歌に合わせてこの二人が舞うからの。歌のイメージを直前までに教えておくとよい」

「はあっ!？」

思わず大声を出してしまった燐におばはいう。

「なに、イメージを伝えるのはこやつら得意じゃ。心配はいらぬ」

「いやいや、そういう意味じゃなくて！」

「じゃ、食堂に夕食を用意させてあるからそれを食べて今日は早く寝ろ。よいな？ では解散！」

「ちょ、ええー」

予想外の出来事に言葉が出ない燐がカイルとリアンの二人に視線

を移すと、仕方ないなどでもいうように苦笑していた。

「……ああいう人なんだ」

「なんていうか、その、……ジコチュー？」

「まあな！ さっ、飯食おうぜ！ 俺もう疲れたし腹減ったしでもうだめだー」

「お前寝てただろうが」

会話をしながら食堂に用意されていたパンとシチュー、サラダを食べ終え、二人に部屋まで案内された。

「ここがお前の部屋なー。お前の部屋はさんで俺らだから。右が俺で、左がカイル」

説明と案内を終えたりアンとカイルがそれぞれの部屋へと引き上げ、部屋の中には燐だけが残された。

「……わたし、なんでこんなとこに来たんだろ」

ぼつり、と小さくつぶやいた燐は、窓際に置かれた椅子に座って窓を開けた。

燐の住むあちらの世界ほどではないにしろ、活気があふれた町にはまだ街灯や店の灯りが灯っていて、その光が部屋の中にうつすらと差し込んできて、さまざまな色が踊る薄暗い室内は海の中を思わせた。

「きれい……」

景色をボーッと見ていると、この世界にきた当初は感じなかった寂しさや不安感が押し寄せてきた。どうしようもなく寂しくなって自分を抱き込むように両肩をつかんだ。

「ふ……っ、うう……！」

思わず涙がこぼれてしまいが、どうしよう、と悩んでいるのは燐の性分ではない。残る不安感などを押し込み、深呼吸して口を開いた。

「 緑の風が吹くときに、私の声^{ぬくもり}を思い出して

橙の灯りが灯るとき、私の温度を思い出して

あの日見た君の涙を、嘘にはしたくないから

君に笑顔を届けにいくよ　その涙が溶けて消えるまで」

歌い終わった後、少しだけ落ち着けたように感じて安心する。

（　これが現実だというのなら……私は、ここで生きていかなければいけない。ここががんばれば、元の世界に戻るかもしれないし。）

知らない世界に放り出されて、信じていいのか分からない人たちと話し込んだ上に腹を殴られ、もっと知らない場所に連れてこられ……。

逃げることもなんていつでもできた。

それでも逃げずにここまでついてきたのは、リアンとカイル以外の人に会ったとしてもその人が『いい人』だったとは限らないからそれだったらしい人そうな二人について行った方がマシだと思っについてきた。

思った通り、いい人っぽかったけど。

そう思いながら窓を閉め、カーテンも閉めてベッドへと向かう。

（私は……無事に帰れるのかな）

洗濯されたシーツの匂いが自分のベッドのものではない、そんな当たり前のことに涙が一粒、頬を落ちて行った。

（……ううん。無事に帰れるかじゃない。何が何でも、絶対に、心も体も無事に帰るんだ。）

涙を拭って気合を入れる。

不安と闘いながらも、生きていく覚悟が今やっとできた。

7話 寝起きと、手伝いと、宿の女將と。

「……ん……？ 朝か。ふ、ああ、あ。眠いなあ。ていうか……早すぎなんじゃ、この時間って」

目を覚ました燐は、まだ朝早く薄暗い紺色に染まった室内を見渡した。

（早く起きすぎたな。しかも朝早いし。眠いの二度寝したら、絶対起きれなくなるしなあ……）

とりあえず、通学途中にいきなりこっちに来てしまったので着替えもなく、寝ていたベッドを整える。

燐ひとりには広すぎるといってもいい室内にはドレッサーが置いてあり、そこに載っていたブラシで肩より少し長い髪を梳かした。（わたし、こんな冷静にいつも通りといってもいいことやってるけど。普通は異世界に来ちゃったファンタジー系のだったらさあ、こう、『ええ！？ ここどこよ、なんでこんなところにいるわけ！？』っていう風になるのが当然っていうやつでしょ。わたしって肝が据わってんのかな……）

とりとめもなくそんなことを考えていると、なんとなく出歩いてみようという気になった。昨日はおばに『今日はもう寝ろ』と言われて言われたとおりに寝てしまい、この宿をじっくり見ることができなかったなので改めて見て回りたくなってきたのだ。

「……ま、いいか。どうせ誰も起きてないだろうし」

グルグルとおんなじことをいつまでも考えていたって、答えが出ないのでは疲れるだけ。そう思い、ドレッサーの鏡に顔を映す。髪の毛はちゃんとなっているかどうか確かめて部屋を出た。

？ ？ ？

「見事に誰もいない……。当たり前か」

人気がない廊下を歩いていく。

足音を立てないようにしてそろり、そろりと歩いていくと、ある部屋からは大きなイビキが聞こえてきたり、またある部屋からはなにやら小さな物音がしたり……燐の他にも起きているものが、そろそろ活動を始める時間らしい。

けっこつ、起きてる人っているんだ……。

そんなことを思いながら一階へ降りると、厨房はすでにあわただしく動き始めていた。

いい匂いに連れられてフラフラと厨房に向かう。

（お腹減ったな……。ここ、なにか食べられるかな。お金持っていないんだけど）

「すいません、あのー……」

今からごはん食べられますか？ そう言おうとして、思わず

口が止まった。

「はい？ ああ、ごはんならもうちょっと待ってくれるかい？」

「あ、はい……」

見上げた先の女将さんらしき人に返事をする。

（……に、しても。）

デカくないか？

燐はビックリして声が出なかった。

「あたしゃこの女将のマルサフ。よろしくね！ で、どうしたんだい？ お腹減っちゃったかい」

「ええつと、はい。そうです。わたしは、木崎燐です。よろしくお願ひします」

「んー。さっきもいったけど、もうちょっとかかるのさ」

「あ、じゃあ、わたしお手伝いしたいんですけど、いいですか？」

「手伝ってくれるのかい！ ありがとう、それじゃ、そのイモの皮剥いてくれる？」

「はい！」

マルサフに示されたところにいくと、大きな籠が二つと、その片

方にこれでもかというほど詰め込まれたイモがあった。

「はい、椅子！ いや、手伝わせちゃって悪いねえ」

「いえ、なんかちよつとやりたかったの」

さつそく包丁を持って皮をむき始める。

デコボコの表面に四苦八苦しなから皮をむき、半分ほど減ったころ、手伝いにきたマルサフと一緒に剥きながらのおしゃべりになった。

「……あ、こう剥くと確かに楽ですね」

「だろう？ ……ところで、さ。あんた、どこから来たんだい？」

「あー。えつと、異世界からです」

こんな风轻く答えてしまつていいのだろうか、というほど軽く答えると、マルサフも納得したように頷いた。

「ああ、そうなんだ。……はあ！？」

「ああ、やつぱりそういう反応しますよね。こつちではこんなこと当たり前にあるんですか？」

「どうなんだろう。前はそんなこともあつたらしいけど、最近はそんな話聞かないしねえ。そうか、あんた異界人だったのかい。なるほどねえ……あ、終わったね。」

そろそろ出来上がるころだろう。行こうか、燐」

「はい」

皮を捨て、立ち上がつてマルサフの後についていき、イモの入った籠をゼエハアいいながら厨房の隅へと置く。

ふーっ、と一息つくと同時に、二つの足音がドタバタと階段を駆け下りてきた。

「そつだ。燐、ちよつとそこにしゃがんでおいで」

「え？ はい」

言われたとおりにしゃがむと同時に、すごい勢いでドアが開き、同時にリアンとカイルが焦った顔で駆け込んできた。

「マフ！ あの子知らない？ ほら、昨日俺らが連れてきた女の子！！ 髪の毛が肩より少し長くて、ちよつと変なカツコしてる子。」

部屋にいないんだよ!!」

「そうだねえ……あ！ 朝早くちよつと外を見物してくるとかいつて行っちゃったよ」

「なんで留めておいてくんねえんだよ！」

「口が悪い！」

リアンの口の悪さがマルサフの気を損ねたのか、壁にかかっていたお玉でリアンとカイル、二人の頭を殴った。

「いってえ！ なにすんだよ!!」

「なんで俺まで……」

ブツブツと文句を言う二人にマルサフは問答無用で言い渡す。

「あんたら二人とも、あともうちよつと食堂で待ってな。おもしろいもんがみれるよ！」

「はあ？ ったく……。で、その女の子は！」

「だあから待つてなつて!!」

しぶしぶといった感じで食堂へ向かう二人の背中を眺めながら、マルサフは燐に声をかけた。

「もういいよ」

よいしょ、と言いながら立ち上がる燐を、今度はどこかへと引っ張られていく。

「な、なんですか!？」

「いいからいいから」

「ちよつ……！ わたしは、お腹が、減ったんです!!」

燐の叫びも虚しく、燐の体はマルサフに引きずられていったのだった。

8話 お駄賃

「あの……こんなの着れませんっ！」

燐は店の奥に連れて行かれ、マルサフに着替えさせられていた。押し付けられた水色のワンピースは裾がロングスカートになっており、上からかけたエプロンは真っ白。この宿の作業着らしいが、見た目は鏡の国を訪れてしまった金髪少女の服装のようである。

もつとも、それよりもいくらかシンプルなものではあるが。

「なあに言っただい！ 着れないなんて、きちつと着られるじゃないか。うん、あんた肌白いいし、よく合ってるよ。髪の毛はどうしようかねえ……。とりあえず上半分だけ結んどこうか」

そう言っただけのエプロンのポケットから取り出した紐で燐の髪を結んだ。

「あ、ありがとうございます」

「そしたら、これをあの二人のところまで持って行って」

「え！？ まさか、この服で……？」

恐る恐るといったふうになると、「もちろん！」と返ってきた。

「ちよ、ありえないんですけど！！ て、いや、あのですね、マルサフさん？ 私もお腹減ってるんですよ。しかも私ってお客さんですよね？ ていいうかなんで給仕しなきゃいけないんですかっ！？」

「そこは、ほら……ねえ？ あの二人ちよつと黙らせようと思って……」

はあ！？とキレ始めた燐をぐいぐいと押して厨房にあったパンやスープが載ったお盆を手渡した。

「じゃ、よろしくね」

「もう……。分かりました」

あきらめて両手にお盆をもって二人の姿を探しながら歩いていく。と、すごい人ばかりが見えた。それだけなら別になんとも思わない。他にもそんな人ばかりはいっぱいあるのだから。

（なんかおかしい……。なんでこの周辺に座っている人たちは顔が青ざめているんだろう。しかもギョウギウウになってるはずなのに、誰も離れないし、むしろ、もっとくつついてる……？）

イヤな予感がした燐は、厨房に戻ろうとしたとき、「ヒッ！」という野太い悲鳴がおかしな人だかりのほうから聞こえた。

またなにかあるのか……と思いつつそちらの方を覗いてみると、険しい顔をしたリアンとカイルの二人がいた。その顔を見て燐は悟った。

この人だかりと悲鳴の原因はこいつらか……！

ちらつと厨房のほうを振り返ると、マルサフがこっちに気づいた。

（ちょ、マルサフさん！　なんか負の気配がするんですけど……！）
と、目線でいうと、

（だから、ね？　黙らせて！）

（いやいや、黙らせてってこういう意味だったんですか！？）

しばらくの間、目線で会話していたが燐が耐えられなくなり、仕方なく人だかりの間を縫って歩いていく。

「ちょーっとすいません。通してくださいよー。うわっ！」

人の背中にぶつかったり、誰かの足に引っかかってコケそうになったりしながらようやく二人の前までたどり着いた。

「何も頼んでないんですけど」

「あ、いや。マルサフさんがこれ持ってけつつってパシられただけなんで」

「パシられた……？　ていうか、え、燐ちゃん？」

やっとこっちを見た二人の顔は、驚き一色に染まっていた。信じられないものでも見るような顔つきに、燐の方もビックリする。

「なに、どうしたの？　あんなふうにへんなオーラまき散らして……。周りに迷惑だからやめてくんない？　あの辺のおじさんたち、窮屈で暑いだろうに、あんたたちにビビってくつついてたんだから」「すまない」

と素直に謝るカイルを尻目に、リアンはさっそく質問してくる。

「ねえ、何その恰好。なんでこんなことしてんの？」

話すまで延々と聞いてきそうなその様子に、ため息を一つつく。

「……あのさ、わたしお腹減ってんの。だから食べながらでいい？
話すの」

「ああ、いいよ」

燐が持ってきたパンなどを三人で食べながら、燐はここに至るまでの話を聞かせた。

？ ？ ？

「と、いうわけだったのです。ちゃんちゃん」

と、水を飲みながらいうと、リアンとカイルが脱力したような表情になった。

「なんだ……。心配して損した」

「まっただ」

「ひつどい！ なにそれ！！」

と会話していたところに、マルサフが近づいてきた。

「衣装、楽しんでくれた？ 燐」

白々しく聞いてくるマルサフのため息をつく。

「あのですね……」

「はい、お駄賃」

「ありがとうございますっ！」

「ええー、変わり身はやッ！ ちょ、ずるい。俺にも」

「誰がお前なんかにやるかつー！」

マルサフとリアンが言い合いする横で、燐はマルサフがくれた袋の中をのぞく。

袋の中には、

「……お金？」

「ああ、少しとはいえ働いてもらったしね。それにこいつら黙らせる……ゴホン、あー、いや。まあとにかく、周りの爺どもも助かったし。あたしも助かったし。それに、あんな負の感情ダダ漏れみた

いなどこ行かせちゃったしね」

「ありがとう！」

「どういたしまして！ あ、燐はこの世界の通貨のこと分かるのかい？」

「ぜんっぜん」

「じゃあこの二人に教えてもらいな。あたしはまだ仕事があるから無理だしね。いいだろ？」

マルサフが話を振ると、二人が頷いた。

「……じゃ、またね。あんたにゴールドヴィ神の加護がありますように」

そういつてマルサフは「ああ忙しいっ」と厨房へ入っていった。

「部屋で話しよう。それでいい？」

「あ、いいよ」

食べ終わった皿をカイルが片付け、燐は貰ったお金を大切に袋に戻す。

二人分の荷物を持ったリアンが声をかける。

「ごちそうさまーっ。さて、じゃ、行くよー燐ちゃん」

「うい」

「変な返事」

と笑いながら歩いていくリアンの後をついて行きながら考える。

このお金、いくらぐらいだろう。
何買えんのかな……。

8話 お駄賃（後書き）

隣はお金とおいしいものとおもしろいものが大好きですw

9話 衣装替え

「で、マルサフからもらったお金のことだっけ？」

「うん」

燐はマルサフからもらった袋をベッドの上にひっくり返すと、出てきたコインを数え始めた。

「銅色のコインが……2、4、6、8、10枚。これでなにが買える？」

「そうだな。銅貨10枚ってことは、その辺の屋台とかで売ってるお菓子2、3個とかぐらいだな。この世界の母親が子供にその辺でなんか食ってろつつてだすお小遣いぐらいか？」

「ふーん」

そこに二人分の足音が近づいてきた。一人はカイル、もう一人は……。

「そろそろ準備をはじめろっておばばが。まあついてきてるけど」

「……って、燐。おぬし、なぜそんな恰好をしておる」

マルサフに着替えさせられた給仕服のままだった燐に目を見張り、早くこれに着替えろ、と出された服を受け取っても周りにリアンたちがいでは着替えられない。それに気づいたおばばが二人を追い出しにかかる。

「これ、はよう出る！ 着替えられぬではないか！」

「ちよ、痛い！ 押すな、押しながら背中中の皮つねんなっ！！」

「……！」

「こんなもの、皮でなく肉じゃ！」

ギヤーギヤーと騒ぐリアンと、無言で顔が引きつるカイルを追い出すとかなり静かになった室内で燐は着替え始めた。扉を閉めたおばばが戻ってきて「ここに腕を通して……」など言いながら、なんとか着れた。

「なんか……サリーっぽい？」

燐が着ているのは濃い緑色のサリーによく似たもの。それに同じ色の長く薄い布を頭にゆったりと巻いて、顔が見えないようになっている。

手首とはだしの足首にはシンプルで、存在感がある金色のブレスレットとアンクレットが輝いていて、燐が歩くたびにシヤラシヤラと涼しげに音が鳴る。

「この服着てその辺のランプこすったら青い大きなおじさんが出てきて大きな声で『こんにちは！』とか……ないか。あつたら逆に変だよな」

「何をブツブツ言っておる。下に降りるぞい、あやつらも用意ができているはずじゃからな」

？ ？ ？

降りた先には着替えたリアンとカイルが待っていた。

「おお、かわいいじゃん！ ねね、俺らはどう？ かっこいい？」

「うん、ありがとう。わーかっこいい」

「そんな棒読みひどい！」

「うわーん燐ちゃんがイジメてくんだけどーっ！とカイルに張り付きに行ったりリアンは置いというて、おばばに話を聞く。」

「もう曲は知ったか？」

「え、全然。昨日は部屋に入ってすぐベッドで寝ちゃったから……」

「はあ……。カイル！ リアンはその辺に置いてこっちへ来い」

カイルは縋りつくリアンを蹴り飛ばすと、おばばたちの方へと歩いてきた。

「なんだ？ あ、そういうえば曲伝えるの忘れてた」

「今からでいいから伝えておけ。わしはほかに用事があるでな」

杖をつきながら歩いて行ったおばばを見送って、カイルが口を開いた。

「ちょっとおでこ貸して」

「『おでこ』とかかわい……いえ、なんでもないです」

頭にかぶっていた薄い布と髪の毛を持ち上げると、そこにカイルが触れた。

「リラックスしてろよ……」

ほのかに額が暖かくなると同時に、音楽が聞こえ始めた。耳に聞こえるのではなく、直接頭に響くように。

「なに……？　なんか聞こえる」

「それが、今からおまえが歌う唄だ」

「おまえじゃない」

「……分かった。ほら、これで終わりだ。もう覚えているはずだ。直接覚えるようにしたから、忘れないだろう」

「魔法って便利だね」

「出番じゃぞ。外に来い」

おばばが呼ぶ。

「ほら、リアン。行くよ」

「もう……おまえら酷い……」

「はいはい」

9話 衣装替え（後書き）

ぶつ切りですね

カイル、リアンを蹴り飛ばすとか何気にドS（笑）

10話 響く歌、美しき舞

「さっき俺たちが教えたの、覚えてるよね？　じゃ、……行くよ？」
「あー行きたくない」

「そう言うな。おばも楽しみにしてるぞ、客が集まってる方に行
っちまったし」

ため息をつきながらも歩き出す燐を追いかけるようにリアンとカ
イルはついて行った。

旅宿の外壁にもたれるように座る。ちょうど観客が目の前にくる
位置だが、燐は薄い布を幾重にも頭に巻きつけているので観客から
は顔の輪郭がうつすら見えるくらいでしかない。

リアンたちは燐の前に立った。二人は頬に描いた刺青もどきを隠
すように、それぞれ反対の方に顔をそむけながら手を隠すように持
ち上げた。

すうつ

「La - - - -、La - - La - La - - ……」

リアンとカイルが、最初の頃に燐のイメージを読み取ったのと同
じようにして燐に教えた歌は、これといった歌詞はなく、音程もそ
れほど難しくないものだった。

（あれ、なんか声がよく出るなあ。しかもよく響く……最高の瞬間
！？　って、言い過ぎか）

今までになく声が出て、燐は気持ちよく歌っていた。その歌に合
わせてリアンとカイルが、阿吽の呼吸で舞う。

集まった観衆は綺麗な歌声と美しい舞にくぎ付けになった。

だが

「キャアア　　！」

つかの間の時も、悲鳴によって壊された。

「なんだ！？」

「魔物がこの付近に入ってきたらしい！　急いで逃げなけり

や俺らまで巻き添えになっちまう!!」

「おい、逃げろーっ。あ、おいっ、年寄りとか助けるよ!!」

たくさんの声が飛び交う中で、燐は突然の騒ぎに戸惑っていた。

「ねえ、魔物が来て慌ててるってことは危険なんだよね？ 逃げた方がいいんじゃないの？」

そう聞く燐に、リアンはフツと笑って答えた。

「あんな、こういう非常時にはちゃんと対処法があんの！ この街には魔物を撃退する自警団があんのっ」

「自警団って言葉、こっちにもあるんだ……」

「なんか言った？」

燐はうつん、と返して大通りの方を見やった。遠くの方から大きな何かが駆け回るような音が聞こえてくるが、それ以外は静かで人々は一応避難したのかほとんど人はいない。

「さて、じゃあ俺らも行く？」

「は？ どこ行くの？」

「どこって、魔物のところに決まってるじゃん」

なに当たり前のこと聞いてんの？といった風なリアンの言葉にカイルが説明を続ける。

「魔物は自警団が仕留めるのになぜ行くのかといたいんだろう？」

「うん」

「殺された魔物の皮をはいで、油を取り出すんだ。急がないと消えてしまうからな。魔物の油は良し悪しもあるが、それなりの値段で売れるし、はいだ皮は魔道の筋のものに売ればまあ足しにはなる。

だから暇なものは自警団が仕留めた後、見つからないようにしながら必要なものを取りに行くんだ」

「ふーん」

「と、いうわけで……行くぞっ！」

「うわっ、やめろリアン!!」

「なに!？」

いきなり何をしたのか、三人は気づいたら魔物たちのど真ん中に

いた。

「おつまえ……、術を使っただろう！」

「そう、怒んなって。あ、燐ちゃん大丈夫？」

「うえつぶ、き、気持ち悪い……」

「わーっ、吐かないで！」

のんきに騒いでいるリアンと燐を見て、カイルはため息をつく。

「おい、ここがどこだか忘れてないか？ 周りの魔物たちがじりじりと距離を詰めてくるんだが……。しかも多くないか？ 誰も一匹とは言ってなかったが、これはさすがに多すぎるだろう」

「何かに惹かれてきたんじゃないの？ たとえば、普通ではないイレギュラーな存在とか……ね」

一瞬まじめな顔になったリアンとカイルが、燐を見やる。燐はいえ、初めて見た魔物をまじまじと見ている。

「……とにかく、こいつら倒すぞ」

「あいあいさー」

すっ、と立ち上がった二人を見る燐の目は、私はどうすればいいの？と語っている。ような気がしたカイルは、ここで待ってると言い置いて魔物の大群の中に突っ込んでいった。

リアンはいえ、こつちも燐に見つからないようにドーム状の膜を張った後にそのままカイルと同じように魔物たちの中に突っ込んでいった。

「えーと？ わたしはいっただいどうすれば……。ていうかこの膜なんだ？ なんかふわふわしてる」

試しに指で勢いよく突いてみると破れずにそこだけ外へと飛び出し、指を外すと元の形に戻った。

まあいいやと思いつつ周りを見渡すと、次第にそこかしこで爆発が起きるようになった。それに目を見張っているうちに、今度は異様に魔物がバタバタとまるでドミノ倒しのように倒れていく。

「あのふたり、何やってんの？」

しばらく経つと立っている魔物はいなくなり、たくさんの魔物に

囲まれて立ち尽くす二人が目に入った。

「終わったよー」

にこやかに言うリアンとは別に、剣についた血をふっておとしたカイルが疲れたように言う。

「守りの膜を解いてやれ。出らんないぞ」

「ういーっす」

手を横に動かしたリアンは、暇だった？と聞いてきた。

「うん。すっごい暇だった。ていうか二人ともすごいね！ あっという間だったじゃん！ うわー初めて見た、魔法とか剣とか。うわー、うわー、すごいっ！！」

初めて見た魔法や剣に大はしゃぎする燐に言う。

「そんじゃ、俺らいろいろ拾ってくるから、もうちょい待ってて？」

「あ、うん！」

再び離れていく二人を見送って、燐は魔物たちのたくさんの亡骸に向き直る。

その目には、さっきまではしゃいでいた光がなかった。そのまましゃがみこみ、誰に言うでもなく呟く。

「なんかさ、死んじゃった君たちを見てもなんとも思わないのはなんでだろうね？ わたしのなかでは、君たちは虫とかとおんなじなのかなー」

ブツブツと呟く燐を、二人は見ていた。もちろん手は動かしてはいなかった。

「なあ、今さらなんだけどさー。どう思うよ、燐ちゃんのこと？」

「普通の子じゃないか？ 剣とか魔法とか見てあんなにはしゃいでたんだから、よほど平和な世界から来たんだろう」

「そういうことじゃなくって……」

じゃあなんだと聞かれると答えられないが、そういうことを聞きたいわけではなかったのだ。

しかし言葉に表せないため、まあいっか、と心の中で自己完結する。

「おい、さつさと終わらせるぞ」

「わあつてるよー」

ふざけた態度のままのリアンに、カイルはため息をつく。

（リアンは、本気になればすごいんだがな……）

少し疲れたカイルは、腰をつかんで後ろに振り返る。

さかさまになった世界のなかで、魔物の亡骸のなかに一人しやがみこむ燐の背中が寂しそうで、それがひどく印象的だった。

10話 響く歌、美しき舞（後書き）

隣はどういう子なんでしょうね

11話 眠りのち、誘い。

「……あゝんゝたゝちゝ」

やっと帰ってきた燐たち三人は、マルサフの地底から響くような声に出迎えられた。

「いったいなにを考えてるんだい！ 魔法が使えない燐を魔物の群れの中に連れてくなんて！！」

「うつせーな。だいたい俺らがいて怪我させるかっての！」

怒るマルサフについて反抗的な態度で言い返してしまったリアンに待っていたのは、マルサフのフライパンと怒鳴り声が織りなすお説教という名の恐怖の舞踏会だった。

「いででで！ ちょ、やめろーっ」

とりあえずマルサフのお説教はリアン一人に受けてもらうことにして、疲れきった燐とカイルの二人は自室にもどって休むことにした。

「場所、覚えてるか？」

「ん。大丈夫だよ、またあとでね。リアンが帰ってきたらお疲れ様とでもいっつといて」

「気が向いたらな」

背を向けて歩いていくカイルを見送ってから、燐も歩き出す。

多かった魔物の皮をはいだり、油をとったりしていたら思ったよりも時間をくつてしまい、廊下の窓から差し込む明かりは夕暮れの色をにじませていた。

部屋に入った燐は、そのままベッドに寝転んだ。

「つつかれたー……」

疲れ切った体は、横になるだけで眠気を訴えてきた。

（朝、早かったしなー。……そういえばリアン、大丈夫かな。大丈夫だとは思っただけ……ま、いいや）

燐は襲い来る睡魔に身をゆだねた。こういう時は寝てしまつに限

る、とよく分かっている。

沈んでいく意識の中で、リアンとカイルの悲鳴とマルサフの怒声が聞こえた気がした。

? ? ?

ドンドンドンツという何かを連続してたたく音に燐は目が覚めた。
「おい、寝てんのか? なんか誰だか知らねーけど」お前に会いたい』って奴が来てるぞ」

のんきにいうリアンの声に、不機嫌な声を返す。

「……はあ、うっさいんだけど。リアンのせいで起きちゃったじゃん。まったく、もうちょっとしたら下降りるから、ちょっと待っててもらってー」

部屋に入るなりベッドに直行した燐は、結局緑のサリーもどきを着替えずに寝てしまい、おまけに着替えもおまけが持っているためドレッサーの鏡を見ながら手櫛で髪とサリーもどきを整えて部屋をでた。

廊下を歩いていくと、階段の踊り場から一階を見渡した。

「どこにいの……?」

夕方になると宿をとろうとする旅人達で街の宿は盛況で、ここ『旅宿』も賑わっていた。

しかしそのせいで、どこに誰がいるのか非常に分かりづらく、声をかけられてもときおり起こる大きな笑い声などでけして聞こえないだろう。

さて困った、と考えていると階段を上ってくる三つの人影に気づいた。

「おい、やっと来たか! あはは、遅いぞー」

フラフラで語尾に が付きそうなほど陽気なリアンと、それを支えるカイル、その後ろには軽鎧けいよろいを着た見たことのない女性が立っていた。

「リアンどしたの……って、くさっ！ 酒くさッ！！ なに、こいつ酔っぱらってんの！？」

「ああ。……ほら、起きろリアン。起きろって」

「ん？ あははは、カイルと燐の顔がぐるぐる回ってるー。二人とも何やってんのー？」

「おつまえを、介抱してやってんだろ！」

キレたカイルがリアンの頭を殴った。ゴツン、といい音がしたな
くと思った瞬間、リアンが泣き出した。

「うえええええん、カイルが殴ったああああ！ 痛いよー！！」
「えっ泣くの！？」

「あなた、子供じゃないんだから……」

いきなり泣き出したリアンに驚く燐と、その隣で呆れたふうの女性
性は顔を見合わせた。

「あたし、サラ。よろしく」

「わたしは木崎燐です。よろしくお願いします」

ちょうど挨拶を終えたその時、リアンが絡んできた。

「ねーねー。カイルがイジワルしてくるー」

「はいはい、ちよつとあっち行つてろ」

そういつて押しやると、「ぶー。燐のケチー！」と言って人ごみのなかへと消えて行った。

「……で。わたしに用があるっていうのは、あなたですか？」

「ええ、そうよ」

「どういったご用件ですか？」

燐が聞くと、彼女は答えた。

華々しく美しい微笑みとともに。

「あなた、あたしのところに来てくれない？」

「.....は？」

11話 眠りのち、誘い。（後書き）

イメージ的にはサラは華々しい女性です（笑）

12話 サラの話（前書き）

今回ちょっと短いです。

12話 サラの話

「……つまりサラさんたちの泊まっている宿で一緒にバカ騒ぎがしたい、と。いうわけですか？」

やけに長々と説明された理由を頭の中で要約すると、『こっちの宿に遊びに来いよっ』となったので、それを伝えてみるとサラは満足げに頷いた。

「そう、そうよ！ こんな酔っ払いとうっるさいヤツのことは置いて、今夜は私たちと一緒にガールズトークしましょ！！」

説明している間、喉がかわいたのかまるで水を飲むようにアルコール度の高い酒をぐびぐびと飲んでいたサラは、すでにその顔がうつすらと赤く染まっている。

そのせいかやけに上機嫌なサラのテンションについていけずにカイルたちの方を見ると、カイルも呆れた風に溜息をつきながら首を横に振った。

「そいつの言ってることはあんまり気にすんな。おい、サラ。お前もさっさと宿に帰って寝ろ。お前絶対酔っぱらってんだろ」

「ん？ 酔っぱらってなんかいつませくん！！」

語尾に『』が付きそうなほど上機嫌なサラに、酔っ払いはみんなそついうんだよ、と言い返した。

「それに、あまりに帰りが遅くなると……アイツが、くるんじゃないか？」

「え？ アイツ？」

首をかしげる燐とは裏腹に、サラの顔はサアアアツと青ざめていく。しまいにはカタカタと震え始めたサラは、世の終わりだともいつかのように口を開いた。

「……そ、そうね。今日は、帰るわ。あ、あの子が来たら、私の人生が終わってしまうもの。じゃ、それじゃね！ 燐ちゃん！ この話はまた今度っ」

そういうが早いか、サラは足で駆け足で出て行ってしまった。

「ねえ、『アイツ』って誰？」

ウェイターが持ってきたバケツに吐き始めたリアンの背をさすりながらカイルがあいまいに答える。

「んー……、まあ、サラが何か面倒事をおこしたときにくる鬼だ。そのうち知り合うだろう」

今は説明する気がない、とでも言うかのように再び視線をどこかへと向ける。

「あ、おい！ こいつのこと見といてやっといてくれないか？」

カイルが声をかけたのは、『ボンツキュツボンツ』という言葉がよく似合う体に肩を大幅に露出した女性だった。

「うふ、いいわよ？ じゃあわたしの方で預かっておくわね」

そういうとその女性はリアンの肩を支えるようにして立たせると、そのままどこかへ連れて行ってしまった。

「さて、俺たちはもう寝るか」

「あ、うん。ていうか、いいの？ ほつといて」

「気にすんな。あつちはあつちで好きにやるだろうさ」

なんだか違う方の意味に聞こえた気がしたがスルーしてカイルとわかれた。

（つかれたなあ……。早く寝よ）

部屋に入ってそのまま寝ようとしたが、なにか着替えるものはないか探し始める。着替えるものがなくてそのままの格好でいたため、借りた衣装のままだったのだ。

大きなクローゼットを開けて探すと夜着が見つかったのでそれに着替える。

「やっと、寝れる……」

隣はベッドに入ると襲ってきた睡魔に身をゆだねた。深く深く、泥沼のような眠りの中へ沈んでいく。

思ったより疲れていたんだな、とまるで他人事のように思ったの

を最後に、
燐の意識は閉ざされた。

13話 真夜中の訪問者

パリーン！という何かが割れる大きな音がして、燐は目を覚ました。

音のした方 バルコニーに通じるガラス窓のほうを見ると、黒い人影が立っていた。

「……だれ？ 不法侵入で訴えますよ」
「……」

燐が問うても答えないそれは、ふら、と揺れたと思ったたらそのまま床に倒れた。

「はあ……。なんでこんなことになったんだろ」

とりあえず倒れたのをそのままにしておけず、備え付けの長ソファに運んだ。

顔を覗き込むと、肩につく程に伸ばされた髪に包まれた細い顔、長い睫、スウツと通った鼻筋、薄い唇……要するに中世的な顔立ちで、燐は思わず「本当に男？」とつぶやいた。

「……失礼だな」

「うわっ、ごめんなさい！！」

突然気を失ったと思っていた相手から声をかけられ、燐は驚きながら謝った。

「……って、男の人？」

「そうだが」

ムクリ、と上体を起こした男はそのまま室内を見渡した。

「……ここはどこだ？」

「ここは旅宿っていう宿、そういえば名前まんまだな……。って、そこはどうでもよくって、あんた誰？」

「私は……シャザ。シャザと呼べ」

変な間があつた気がするなと考えていたら、シャザはさつさと立ち上がって部屋を出て行こうとしていた。

「ちょ！ あんたどこからでていこうとしてんのよ!？」

「どこって、窓だが」

ああそつなの来たところから戻るの！、と心の中で叫んでいると、シャザが何かを投げてよこした。

思わず手でキャッチするとチャリ、ともキン、とも取れる音がした。

「なにこれ……袋？ って、金貨!？ と、指輪?」

訊きながら袋を開けると5枚ほどの金貨と鎖に通されて首にかけようになっている指輪が出てきた。

指輪をつまんで月明かりにかざすと、指輪についたシンプルな緑の宝石がきらりと美しく輝く。

「金貨は口止め料だ。今夜私がここにいたことを誰にも言うな。親しかろうが親しくなかるうが、だ。その指輪は、もうひと月もたないうちに必要となるだろう。肌身離さず身に着けておけ。風呂に入るときだろうがなんだろうが外すなよ」

言うだけ言うと言と勝手に外へと飛び降りたシャザに驚く。

急いでバルコニーの手すりに近寄り下を見るが、そこには誰もいなかった。

「ここ、そんな低くないよね……? しかも人っ子一人いないって……お、お化け!？ 幽霊!？」

異世界にも幽霊がいるなんてえええ!!と叫ぶと、少し恐怖心が薄れた。

よく考えたら幽霊なんてものはいないのだ。

そう、シャザは生身の人間。自分がこのソファに運んだし、その時もちゃんと重かった。幽霊だったら重さを感じないはず!、と自分を無理やり納得させる。

「……よし、寝よう。寝るのが一番。って、これかけとかなきゃなんだっけ」

もうどうにでもなれ、と寝ることにした燐は、シャザにもらった指輪を首にかけてベッドに横になった。

（なんだか、この世界にはキャラが濃いつていうか、変な人が多い気がするな）

そんなことを考えていると眠れなくなりそうだったので、目をつぶって何も考えないようにする。

そのままジッとしていると、燐はいつのまにか寝ていた。

14話 リアンの末路（前書き）

いつもお読みくださりありがとうございます

評価ポイント・感想、嬉しいです！

まだまだダメダメなわたしですが、これからもどうぞこの小説をよろしく願います！！

14話 リアンの末路

朝になり、目を覚ました燐は真っ先に胸元を確認した。そこには首から延びる鎖と、そのさきで揺れる銀色の輪と日に照らされて輝く緑の宝石があった。

それを確認した燐は、「はあああ〜っ」と盛大にため息をつく。

「……アレ、だ。なんか異世界にきたらこういうイベントって当たり前ってことだ……よね？」

面倒なことにならなきゃどうでもいいや、な燐はさっさと着替えてカイルの部屋に向かった。

「おーい、おはよう！ 起きてる？」

「お前の声で起こされたわ……。あのな、ノックくらいしろ」

『怒る』を通り越して『呆れ』の表情のカイルに、燐は申し訳なさそうに笑う。

「うん、ごめん」

「ああ。……って、お前そんな指輪首にかけてたっけ？」

「えっ」

しまった！、と思うと同時に自分の不注意さに穴を掘って埋まりたくなった。

シャザは自分のことを人に話すなど言っただけで金貨と指輪を置いて行ったのだ。それ以上なにもしなかったということは、話したらすぐに自分と話を聞いてしまった人たちのことを始末できる、ということだったのではないか。

そこまで考えた燐は頭の中で必死に嘘を紡ぎあげた。

「じ、つはね〜？ 昨日あたし達の歌と踊りに感動した幽霊が『これどうぞ』って置いてったんだよ！ あ、そういえば昨日おばばに借りた衣装を返すの忘れてた！！ 返してくるから、またねっ」

そういつてはたから見ても怪しいと感じる燐は出て行った。

一人ポツンと部屋に残されたカイルは去って行った燐の背中に、
「……結局、何しに来たんだ？」
と、呟いた。

？ ？ ？

「はあ、はあ、はあ……っ。あつぶなかつた〜！」
自分の行動が不自然なことは分かっていたが、あのままだと言っ
てしまいそうだと思ったので逃げてきた燐は部屋のクローゼットに
仕舞っておいた衣装をおばばに返すために衣装を持って一階へと降
りた。

「あ、おばば、それにマルサフさん！ おはようございます」
「おはよう、よく眠れたかい？ 待つてな、今朝食を出すから」
「ありがとうございます。おばば、借りっぱなしだった衣装返すね」
「おお。しかしカイルはまだ降りてこぬか。リアンはどこぞの女に
連れて行かれたようだの、まったく情けない。いや、それ以上に酔
っぱらって女どもを閨ねやに誘っておったそうではないか。まったく、
女を追いかけますのも大概にしるいつも言って聞かせておるじゃ
ろくに、あやつには耳が付いておらぬのか。いやむしろっている
耳は飾り物か……」

燐から衣装を受け取りつつ言い出した言葉が次第にリアンに対す
る小言になっていく。

燐が苦笑しながらマルサフが用意した朝食を食べていると、問題
の二人がそろって降りてきた。

「いや、昨日の女性はどう美しすぎて目がくぎ付けだったよ！

しかもあの性格。まさにオレの女神……」

「おい、その辺にしておいた方がいいぞ」

「なんだよ、のろけられていやになつたか」

「ああそうだよ。それより、お前のために言ってるんだからな。今
すぐその話題をやめるべきだ。後悔するぞ」

「もー、ひがむなよ。まあ仕方ないよなあ、俺ってもてちゃうから、

な……って、うげ！ おばっ！？」

カイル相手に上機嫌に喋っていたリアンは、おばの姿を見て固まった。

「ほう……？ ずいぶん機嫌がよいのう、リアン？」

「い、いや違うんだ！ これには海よりも深く、空よりも果てしない理由があつてだな」

「つべこべ言うな！！ そこに直れ。今日という今日こそはお前のその腐った性根を叩き直してやろう！！」

「ひ、ひえええ！！」

悲鳴をあげて逃げ惑うリアンにおばが持つ杖の先から飛び出した光が襲う。さらに悲鳴を上げるリアンをよそに、カイルは隣の隣に座ってマルサフに朝食を頼んだ。

後日流れた噂話では、部屋の隅で水の入ったバケツを両手に下げて頭にも載せ、さらにつま先に漬物石が置かれて必死の形相になっているリアンの姿が目撃されたそうだ。

15話 買い物と噂話（前書き）

今回すっごく短いです。

15話 買い物と噂話

それはお仕置きを受けている真つ最中のリアンを除いたカイルと燐がマルサフに言われて買い出しに来ていたときだった。

「おい、聞いたか。まあ隣国の王族が精霊に無理やり契約を迫ったそうぞ」

「聞いた聞いた。ったく、バカだよなあ」

「でも仕方ないんじゃないか？ 隣国は、精霊とはあまり関わりがなかったんだろう？」

人が賑わう市場を、隙間を抜け、ぶつかって謝り、大きな声で寄って行けと出店からの声を笑顔でごまかす。そんなときにふと聞こえてきたその話し声は、あつという間に聞こえなくなってしまうた。

「ねえ、カイル。精霊と契約するのってそんなに大変なの？」

「なんだよ急に。……まあでも、けっこう大変らしいぞ？ 契約っていうのは精霊が気に入った人間と交わすものだからな。人間が無理やり交わしたって、精霊が嫌がっていたら力なんてあつてないよなものだ」

流れる人ごみに逆らい、横の店へと近づいていく。燐はそのあとを見失わないようについていく。

「おい、この紙に書かれてるものを全部くれ。……契約ってのは、信頼の証みたいなものだ。この人間なら自分の力を貸し与えても悪用することはないだろう、ってな。精霊と契約してる人間なんて、めったにいない。昔はたくさんいたらしいが」

これもどうだい？ と差し出してきた何かの葉も「もらおう。全部この袋に入れてくれ」と言うと、カイルは少しかがめていた背を伸ばしてふうつと息をついた。

「どういうこと？ 昔はたくさんいたって、今は？」

「それだけ精霊が信用できる人間が少なくなってきたってことじゃないのか？ 遥か昔にはたくさん精霊と共存していた時代も

あつたらしいが……」

品物が入った袋を受け取り、代金を払ったカイルは「行くぞ」と声をかけ歩き出した。朝というには少し遅く、かといって昼に近いわけでもない時間にもかかわらず、市場は人でにぎわう。むしろさつきよりも多くなつてきているんじゃないかとさえ思わせた。

「ふーん。カイルつて神話とかに詳しいの？」

「いや、この世界の住人ならば誰でも知っているんじゃないのか？俺は小さいころに母に読み聞かされた」

カイルの後をついていく燐は人にぶつかることもなく歩いていたが、ふと目に留まった店に行きたいとカイルを引っ張っていった。

「おい引っ張るな。……って、なぜ食いもの屋に」

「ふ、歩いたらお腹がすくだろうが！！　つーわけでカイルさん、おごってください」

命令しているのかお願いしているのか分からない口調で言う燐にカイルはハア、と溜息をつくとチーズを練りこんだパンを一つ注文した。

「ったく、なんでこうなる」

「はは、わたし空腹には勝てないんだよね」

「さつき朝食食べただろうが」

と言うカイルに「それとこれとは別！」と言り返した燐が耳にしたのは騒々しい怒鳴り声と人々の悲鳴だった。

16話 買い物と噂話、その2

声のする方へと目を向けると人ばかりができており、その人の多さにつられて覗き込む人もいた。

「おい、どうしてくれるんだ。ええ！？ 見ろ、オレの服が汚れちまっただじゃねえか！」

「す、すいません。すいません」

人々の見つめる先にいたのは、体格のいい三人の男と、それに二人の少女だった。一人は謝っているがもう一人は知らぬ顔で空を見上げている。

「すいませんじゃねえよ、オレの服どうすんのかって言うてんだよ！！」

「汚れた服をどうするのかもわからないの？ あんたの脳、頭蓋骨の中でカラコロ言うてぐるぐる回ってんじゃないの」

ハッと笑って燐が放ったその言葉に、そこにいた全員が凍りついた。

なぜ、問題を起こそうとするのか！

カイルはため息をついた。燐はリアンと同じぐらいに、もしくはそれ以上に取扱いに注意しなければ。もう起こってしまったことから仕方ないが、終わったら二度と挑発するようなことを言わないよう約束させたほうがいい。

「……今、なんと言った」

「耳も遠いんだ。救いようがないね、あんたら。あんたたちでもわかるように言っただけあげるから、耳の穴かっばじってよおおお聞くきなさいよ」

カイルがこの後のことを考え、軽く現実逃避に入りかけ油断しているすきに燐は挑発する言葉をもう一度凍りついた空気の中に投げ入れた。

「あ・ん・た・た・ち」

そこですうつと息を吸い、最後に力強く言い放った。

「ばあつかじゃないのー！？ …… って、言っただよ、このグズ
！！」

普段の隣からは考えられない暴言にカイルは固まる。それと同様に、集まった人々、その人々の視線を受ける三人組も固まり、まるで放たれた言葉を『皆一緒に理解しようとしていますよ』とでも言わんばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7369s/>

私と君と異世界と

2011年11月26日18時47分発行